

悪霊 第二部・支那の三角帽子

悪
霊
第
二
部
・
支
那
の
三
角
帽
子

【登場人物】

- 伊集院満枝……………H市の地主の娘
猪俣佐和子……………満枝の元クラスメイト。東京で左翼活動に従事
安西小百合……………伊集院満枝の一年後輩
佳代……………貧しい農家の娘
喜代美……………女工
小沼健吾……………労働運動家。伊集院家の元小作人
篠原ヨシ……………伊集院家の使用人
堀田弁護士……………満枝の法定後見人
川奈昭一郎……………満枝の元婚約者・昭三の父。川奈産業社長
伊集院太吉……………満枝の父

昭和四（一九二九）年十月。東京市、北海道H市

Ⅲ

「そろそろ、失礼させていただきます」

猪俣佐和子は、忙しく校正刷りに眼を通していている編集長の机の前に立ち、頭を下げた。

「ああ、ご苦労さん」

編集長はちらりと佐和子を一瞥し、再び校正刷りに眼を落とした。

「届け物がございますか？」

忙しく机に向かって仕事をしている他の編集部員に呼びかけると、ひとりが手を挙げ、これを頼む、と茶封筒を差し出した。印刷所に入れる原稿である。

茶封筒を受け取り、もう一度挨拶して、外へ出た。

佐和子が務める新時代社は、小石川区にある三階建てビルの一階に間借りしている。印刷所は歩いて十分ほどの距離だ。帰り道、編集者の朱（訂正）が入った原稿や校正刷りを印刷所に届けるのも、佐和子の日課だった。

印刷所の門をくぐり、顔なじみの守衛に茶封筒を渡す。お疲れさん、寒くなったねえ、と笑顔を見せる老守衛に微笑み返し、佐和子はいそいそと駅に向かった。

昭和四年は、あと二十日ほどで終わろうとしていた。十月にニューヨークで株価が大暴落し、世界的な恐慌が始まっていた。街には失業者が溢れ、農村では娘の身売りや欠食児童が急増していた。世界は、不安に満ち満ちていたが、佐和子の心の裡は別だった。

駅で電車に乗り、向かった先は日暮里である。駅を降りてしばらく歩くと、工場が建ち並んでいる。工場外を抜けると、労働者たちが住む貧しい住宅街になっていた。軒の傾いた平屋が雑然と並んでいる。

そのうちの一軒が、今日の「研究会」の場所だった。

小沼の使者と名乗る男が現れ、「研究会に出来ませんか」と誘ってきたのは、一週間ほど前である。北海道から上京してきた伊集院満枝と再会し、小沼を紹介されてから一ヶ月以上、佐和子にはなんの連絡もなかった。雑誌社の仕事もかなり覚えてきて、より重要な役割も負かされるようになるうち、警察に捕まるのではないかという不安は消えていった。「黨員」であるらしい小沼から連絡がないことも、気にならなくなった。

そこへ、研究会への誘いがあったのだ。佐和子は迷いつつ、出席すると答えた。満枝は、小沼を頼れと言っていた。その言葉に抗える佐和子ではない。何より、小沼とのつながりを切らさないことは、北海道にいる満枝との関係を維持することのように感じられる。

格子戸を叩くと、玄関に人影が立った。

「井上です」

佐和子は、胸の鼓動を鎮めつつ、告げた。研究会では、この偽名を使うよう、小沼から指示されていた。偽の名前を使うという行為そのものが、佐和子にとっては冒険だった。

格子戸が開くと、小沼が立っていた。頭を下げて挨拶しようとする、右手をあげて押しとどめ、無言で家の奥を指した。

襖を開けると、六畳の部屋には、二十歳前後と思われる娘が五人、膝を崩して座っていた。ふしくれだった指、ほつれやつぎあての目立つ貧しい身なり、髪の毛の生え際にこびりついている煤のようなものは、地味ながらきちんとアイロンの当たったスーツにスカート姿の佐和子とは対照的だった。

「あなた、初めてだね」

大柄な娘が振り向き、歯を見せて笑った。ふっくらとした丸顔で、意外と整った、愛嬌のある面立ちの娘だった。

「ここ、座りなよ」

尻をずらして指差した。

はじめまして。お辞儀をして部屋に入った。他の四人は、堅い面持ちで軽く頭を下げた。

「あなた、女工じゃないね」

佐和子が座るなり、大柄な娘は、満面の笑みを向けた。

「え？」

訝しげに見つめる佐和子に、娘は言った。

「だって、指がきれいだもん。どこかのお嬢様みたい」

「……………」

答えに窮していると、娘は快活に続けた。

「あたいたち、近所の工場で働いているんだ。これから、偉い先生が来て、いろいろ教えてくださいませんか。授業なんて尋常小学校以来だよ」

「あなた、本の字を見ると、すぐ寝ちやうって言ったじゃない」
他の娘が相好を崩して茶々を入れた。

「今日は、お話だもん。ちゃんと起きてるさア」

娘たちはけらけらと笑いさざめき、佐和子も釣られて笑みを浮かべた。大柄な娘は、佐和子の笑顔に嬉しそうに言った。

「あたいは、貴代美きよみってんだ。あなたは？」

「え……」

偽名を使えという小沼の指示が脳裏をよぎったが、それは、あけつびろげに好意を示してくる娘に、失礼な気がした。下の名前だけを告げた。

「佐和子、です」

「おさわさんか、よろしくね」

襖ふすまが開き、帝国大学の制服を着た青白い顔の若者が入ってきた。小脇にノートを抱えている。若者は、娘たちに向かい合って座った。娘たちは居住まいを正し、深々とお辞儀をした。

「今日は……」

若者はノートを広げ、分厚い眼鏡のツルをつまみ、口を開いた。

「『デール・コムニステイツェン・マニフェスト』を講義いたします」

言うなり、ノートを読み始めた。

「すべての歴史は、階級闘争の歴史である」

階級闘争という左翼用語に、佐和子の肩がびくりと動いた。

「……自由人と奴隷、貴族と平民、領主と農奴、親方と職人、一言で言えば、抑圧者と被抑圧者が不断に対立しあい、中断することなく、闘ってきたのである」

どこかで聞いたことがある一節だ。そうだ、先日、神田の三省堂で立ち読みしたマルクス全集の、題名は『共産党宣言』……。

学生は無表情に、ノートを読み続けた。

……封建社会が没落し、現代はブルジョワジーとプロレタリアートの、敵対する二大陣営に分かれた。

……ブルジョワジーは、人間から様々な封建的絆を容赦なく剥ぎ取り、人と人の間に、むきだしの自己利益以外の、冷淡な「現金払い」以外のいかなる関係も残さなかった。

……ブルジョワジーは、従来、崇拜され尊敬されていたあらゆる職業から、その威光を剥ぎ取った。医者、僧侶、詩人、学者を、単なる賃金労働者に変えてしまったのだ。

……ブルジョワジーは、家族関係をただの金銭的關係にした。

……ブルジョワジーはこうして、封建制を打ち倒した。だが、それに使った同じ武器が、今ではブルジョワジーに向けられている。

……ブルジョワジーは自分たちに死をもたらす武器を鍛えただけではない。その武器を使いこなす近代的労働階級、すなわちプロレタリアートを生み出した。

……機械の利用拡大や分業化によって、労働者は機械の付属物になり、求められるものは単純作業だけとなり、精神的負荷は増加した。工場で働く労働者は、産業軍隊の兵士となり、階層化された将校や下士官の指揮の下、奴隷化されている。

……プロレタリアートは、その誕生とともにブルジョワジーとの闘争を開始した。彼らは、機械を破壊し、工場を焼き討ちし、中世の職人という消え去った地位を取り戻そうとした。だが、プロレタリアートが団結せず、国のそこかしこに散らばっているだけでは、勝利は不可能だった。……しかしいまや、プロレタリアートの団結は容易となった。鉄道などの通信技術の発達がそれを可能にした。プロレタリアートは階級として組織化され、やがて政党の結成につながっていくのだ。

……現在、墮落し腐敗したブルジョアジーに対する、発展し組織化されたプロレタリアートのたたかいが、あらゆる社会で荒れ狂っている。それはやがて内乱となり、革命が勃発し、最終的にブルジョアジーの暴力的打倒へと到り、プロレタリアートの支配が始まるであろう……。

ぱたんとノートが閉じられ、抑揚のない声音で続いていた朗読が打ち切られた。

前かがみになって首を伸ばし、引き込まれるように耳を傾けていた佐和子は、我に返って背筋を伸ばした。

「今日のところ、何か質問はありますか？」

学生が聞いた。娘たちがおぼろげと互いの顔を見合わせるなか、貴代美と名乗った女工は、まぶた瞼を閉じ、ふくよかな体を前後に揺らめかせている。

「その君」

学生が、貴代美を指差して言った。

「君……、居眠りしてる君！」

「はいっ！」

貴代美は飛び上がった。ぱつちりと目を開けて叫んだ。

「よく、わかりましたア！」

他の娘たちが口には手をあててくすくす笑うなか、学生は不機嫌そうに言った。

「本当かね。何がわかったのかね？」

「へ？」

「へ？ じゃない。今日の講義で何がわかったのか、言ってみたまえ」

「あの……」

貴代美は眠い眼をこすりながら小首をかしげていたが、やがて、ひらめいたように素っ頓狂な声をあげた。

「つまり……あたいたち労働者が団結して、悪い金持ちのきんたま、蹴り潰してやんないと、世の中よくならナイってことです！」

娘たちはどっと笑いさざめき、貴代美は頭をかきつつ得意げな笑いを浮かべた。学生は苦虫を噛み潰したように顔を顰めた。

佐和子はひとり、俯いていた。

金持ちのきんたま蹴り潰す……。

そのあからさまに猥雑な響きが、心の底に押し込めていた記憶を呼び覚ました。あの時、佐和子は潰したのだ。

川奈昭三のきんたまを……。

「静かに！」

学生は痲癩かんしやくを起こす寸前の顔つきだった。

「だいたい、そういう下品な言葉遣いは慎みたまえ、君」

「あーら、なんか、ブルジョワっぽい言い方だなア」

貴代美はさっと切り返した。

「あたいたちプロレタリアートは、きんたまぐらい、普通に使ってるよ」

さらに娘たちは笑い、学生は顔を真っ赤にして立ち上がった。乱暴な足取りで襖を開け、玄関へと去っていった。

玄関では、小沼健吾がひとり、上がりかまちに腰をおろし、煙草をふかしていた。荒々しく出てきた学生に、ご苦労さんです、と立ち上がって頭を下げた。

学生は、小沼をにらみつけ、僕はもう、ごめんこうむる。あんな礼儀知らずの下品な娘たちに、いくらマルクスを講義したってわかりっこない、と言いつち、出て行った。

やれやれ……。

小沼は再び腰をおろして呟いた。

ああいう下品な娘たちのほうが、あんたらインテリより、いざとなったら頼りになるんだぜ。

学生が出ていった後、小沼は娘たちに茶菓を振る舞った。貴代美を中心に話に花が咲き、娘たちが外に出た時は、すでに十時近くだった。

「あーあ、遅くなっちゃまったねえ。あんた、おうちはどこ？」

貴代美が伸びをしながら、佐和子に訊ねた。

「弥生町よ」

「これから帰ると、もっと遅くなるね。うちにおいでよ。泊めてあげるよ」

貴代美以外の女工たちは、工場の隣にある寮で寝泊りしていた。貴代美だけは、駅に近いアパートに住んでいるのだという。

「ね、行こうよ。あんた、お酒、呑める？」

佐和子が、呑んだことがない、と首を振ると、貴代美は、じゃあ教えてあげる、と強引に佐和子の袖を引っ張って歩き出した。

貴代美のアパートは、そのなりに似つかわしくない、瀟洒しょうしやな洋風のつくりだった。寄木張りよせぎばの床に、ベッドや衣装箆筒、小さなテーブルに椅子が置いてある。

ものめずらしげに眺め回す佐和子に、貴代美は「お風呂、行こうよ」と誘った。

「工場にも、お風呂はあるんだけど、汚いし、混むし、男の職工が覗くし、まったくイヤになっちゃうよ」

近くの銭湯で、湯船でからだを伸ばしながら、貴代美は言った。肥満体ではないが、肉付きがよく、乳房が瓜のように大きい。小枝のように痩せた佐和子とは対照的だった。

「だから寮じゃなくて、あのアパートに住んでるのよ」

「そうなの」

「家賃は高いけどね。ご不浄も部屋についてるし、極楽だよ。工場の給料だけじゃとても払えないけどね」

「じゃあ、どうやって払うの？」

「週に五日は、工場が終わってからカフェで働いてるの」

「ほんとう？」

「うん。あたい、女工でもあるし、女給でもあるんだ」

銭湯を出た後、酒屋でビール瓶を二本買って、アパートに戻った。

初めてのビールに、佐和子は一口で真っ赤になった。貴代美のちよつとした冗談に笑い転げ、何時になく饒舌に喋った。

「ねえ」

意味もなく左手をひらひらさせ、右手に持ったコップを口に運びながら、佐和子は訊ねた。

「あなたさつき、あの学生に言ってたわよね」

「えーと、なんだった」

「要するに、階級闘争とは……」

呂律の回らぬ舌で、佐和子は言った。

「労働者が団結して、悪い金持ちのきんたま蹴り潰して……」

貴代美は大きな口を開けて笑った。

「ああ、言ったねエ」

「あなた、ほんとうに、きんたま蹴ったこと、あるの？」

「あるよオ」

貴代美はさらりと答えた。

「子どもの時から、男と喧嘩して負けたことなかったもん。よく、あそこを蹴って泣かしてやったよ」

「たくましいのねえ……」

「そのくらい出来なきゃ、女工も女給も務まらないよ。助平すけへいな男が、いくらでも寄ってくるんだから」

貴代美は、工場に勤めはじめた時、彼女の大きな胸をからかった職工の股間を蹴り上げてやったことを話した。

「からかうだけじゃなく、胸に触ってきやがるからさ、その場でガンってやってやったんだ。口から泡吹いて倒れて、いい年した男がわんわん泣いて痛がってた。それ以来、男は誰も、あたいには寄り付かないんだよ」

「痛快ね」

佐和子は、コップをテーブルに置き、両手で頬杖をついた。

「わたくし、あなたと違って度胸がないの。思い切ったことができないの。昔からそうなの」

「育ちがいいからだよ」

「そうじゃないの。そんなことをしたらどう見られるだろうかと、とか、すぐ悩んじゃって、行動できないたちなの」

「だって、ちゃんと来たじゃないか。研究会」

貴代美はさらりと言ったのけた。

「だってあれ、危ないんだよ。警察に見つかったら、つかまって、下手すりゃ死刑だよ」

その夜遅くまで、貴代美が語った言葉の断片をつなぎ合わせると、こういうことになる。

貴代美の工場には、「党」から派遣され、職工として潜り込んだ「細胞」と呼ばれる男がいる。「細胞」が分裂を起こしながら増殖していくように、工場の労働者を勧誘し、同志に仕立てあげていくのが任務だ。集まった「同志」のなかから精鋭を選んで「黨員」にし、さらにより多くの同志を獲得させる。こういう勧誘行動は「オルグ」と呼ばれていた。

貴代美はまだ「黨員」ではないらしい。研究会に出かけたのも、単なる好奇心のようだった。社会主義運動についての彼女の理解は、確かに「悪い金持ちのきんたまを蹴り潰す」という以上のもものではなさそうだった。ただし、非合法活動に関わることが、治安維持法で定められた重罰を下される可能性があることは、ちゃんと承知していた。

その夜の佐和子には、そんな貴代美がともまぶしく見えた。女給として働いているカフェでも、貴代美を崇拜し、言い寄ろうとする客が何人か結構いるらしい。貴代美はそういう客たちをうまくあしらいながら、結構なチップを手にしていて、それが、女工としては見分不相応な洋風アパートの家賃の大部分を占めている。このようなたくましさを持った娘は、北海道の女学生だった頃の佐和子の周りにはいなかった。

満枝さんとも違う……。

満枝は強い。だが、大地に根を張ったような貴代美の強さとは、別のものではないか。酔いが深まり、次第に混濁していく意識のなかで、佐和子はふと、そう思った。

翌朝。

ベッドで目を覚ますと、魚を焼く匂いが漂ってきた。テーブルには米桶こめおけと味噌汁の鍋が置かれている。貴代美が床にあぐらをかいて、七輪しちりんで目刺めざしを焼いていた。

「おはよう、よく眠れた？」

うなずき、身を起こして、眩暈めまいがした。頭が重い。喉が灼けつくように乾いている。

「二日酔だね。ウイスキー半分空けちゃったじゃない。覚えてる？」

貴代美はからかうようにいい、水差しの水をコップに注いで佐和子に差し出した。

「ありがとう」

水を飲み干して、ため息をついていると、貴代美がその傍らに座り、顔を寄せてきた。

「覚えてないみたいね。その調子じゃ、夜中にあたいに抱きついてきて泣いたことも、忘れてるよね」

え？

虚を突かれた面差しの佐和子に、貴代美は相好を崩して言った。

「誰だか知らないけど、女のひとの名前を呼びながら、あたいのおっぱいに武者ぶりついてたじゃないか」

顔がみるみる熱を帯びた。俯うつむく佐和子の頬に、吐息とともに柔らかなものが触れた。

貴代美の唇だった。

その柔らかな唇が、佐和子の頬から唇へと移動した。貴代美の両手が、佐和子の細い体を抱きしめた。佐和子は抗あがわず、自らの両手を、貴代美の広い背中に廻した。貴代美は顔を離し、しばし佐和子を見つめた。その唇を佐和子の耳元に寄せ、そっと咬くいた。

「あたい、あんたのこと、好きになっちゃったみたいだ」

IV

昭和五年の正月が明けた。

松飾りも取れ、歳末年始の慌しさが、ようやくおさまろうとしていた日曜日の朝、安西小百合は、北海道日市の市立図書館にいた。一昨年の夏に開館した鉄筋コンクリート二階建てで、蔵書は三万冊にのぼる。

佐和子は閲覧机に座り、書庫から引き抜いた一冊の本を開いて、忙しく鉛筆を動かしていた。勝海舟著『氷川清話』である。

最上級生である六年生になった小百合は、二ヶ月ほど前、授業の社会見学として、函館五稜郭を見学した。幕末に榎本武揚が幕府艦隊を率いて立て籠もった西洋式の要塞である。以来、幕末から明治にかけての歴史に興味を持ち、時々、図書館によっては、その方面に関する本を読んだり、ノートに写したりしていたのである。

西郷隆盛と江戸城引き渡しについて談判し、無血開城に導いた人物の、洒脱で齒切れの良い語り口に引き込まれ、夢中で書き写していくうちに、ふと、手が止まった。めくったページには、このように書かれていた。

……ここにおれの感服した人間が三人ある。それはいずれも囚徒で、維新の際におれが放免してやった奴だ。一人は女囚だが、おれはその罪状を聞こうと思って、わざわざ人を払って、その

女と差し向かいになって訊問した。

……ところが、その女は、これまでだれにも話さなかったけれど、安房守様だけには、お話し申しましようとお前置きをして、さていうには、「私の顔のきれいなのを慕うてか多くの浮かれ男が寄りついてまいるのでそのうち、金のありそうなやつには、心を許したふうをみせ、○○のとき○○をひねってこれを殺し、金だけ奪いとってそしらぬ顔をしていた。すると医師が見ても死体に傷がないからなんともいたし方がない。この方法でもって、これまでにちようど五人殺しました」と白状した。実に大胆きわまるではないか。

○○に入る言葉は、想像がついた。男の睾丸をひねり潰して殺した女が、あの時代に実在していたのだ。しかも「そしらぬ顔で」五人も。

……罪ぶかい女だわ、わたくし。

伊集院満枝の言葉が、脳裡に蘇ってくる。頭のなかから追い出したくても、こびりついて取れないあの時に見た光景とともに。

息が乱れ、じっと座っていることに耐えられなくなった。外の空気を吸いたい。小百合は立ち上がった。立ち上がって踵を返すと同時に、あ、と喉の奥で小さく叫んだ。

目の前に、その伊集院満枝が立っていた。

「お久しぶりね」

満枝は頭をちよつと横に傾け、にっこりと微笑んだ。黒っぽい和装に、髪を三つ編みのおさげにした女学生風のいでたち。手に、紫色の風呂敷包みを抱えている。

「お元気？」

小百合はうなずくのがやっとだった。背の高い満枝の眼差しが、小柄な小百合の肩越しに、閲覧机の上に開いた『氷川清話』に注がれた。小百合は慌てて体をずらし、開かれた箇所とから満枝の眼差しを遮った。

満枝は眼を細めて笑った。小百合が読んでいたページに書かれていた内容を知っての笑いかどうかはわからない。

「お勉強なの？ ご精が出るわね」

「あの……」

小百合は、つかえそうになる言葉を喉から押し出した。

「伊集院さんも……その、お勉強ですか？」

「ええ、ちよっと調べもの」

満枝は、小脇に抱えた風呂敷包みに眼をやった。

「ある文章を、翻訳していただいたのだけれど、ところどころ意味が通じない言葉があるので、事典で調べていたの」

風呂敷包みの中身は、どうやら書類のようだった。

「そうそう。これから、その文章をガリ版刷りにしてもらうのだけど、あなたにも一部差し上げるわ。ご住所を教えてくださいさる？」

思いついたように言う満枝に、小百合は顔を強張らせた。住んでいる場所を満枝に教えてよいものかどうか……。

満枝は、『氷川清話』に出てくる女囚のように、幾人もの男の「○○をひねって」殺したかもしれないのだ。

だが、満枝の澄んだ大きな眼に見つめられると、小百合は抗うことはできなくなる。吸い寄せられるように、家の住所を喋ってしまった。

「では、後ほど、一部送るわね」

そう言うって頭を下げると、満枝は、すっと伸ばした背を見せて、静かに去っていった。

数日後、学校を終えた小百合が帰宅すると、母親から「さっき届いたわよ」と小包を渡された。差出人は、満枝だった。

お友だちから？ と訊ねる母親に、言葉を濁して自室に入った。I高等女学校に通う生徒のなかでは、小百合の家は裕福なほうではない。自室といっても三畳の狭い畳の部屋があてがわれているだけだった。かばんを部屋の隅に置き、震える手で小包の紐を切った。油紙を取り除けると、五十枚ほどの藁半紙を閉じた冊子であった。表紙には、ガリ版刷りの黒々とした文字で「湖南省農民運動視察報告」とあり、その傍らに小さく「一九二七年三月」と日付があった。三年前に書かれた文書であるらしい。

満枝の手紙が添えられていた。

……この文書は、誰にも見せず、小百合さんだけが読んで下さいね。読み終わったら、うちに届けてくださると助かります。郵送でなく、ご自分で持っていらして。

小百合は顔をあげ、左右を見回した。父と兄は、まだ勤め先で働いている時間だ。母親が、台所で水仕事をしている音が響いてくる。

小百合は息を詰めて冊子を開いた。

「農民問題の重要性」という見出しがあり、「余は、この度、湖南省に赴き、湘潭、湘郷、衡山、醴陵、長沙の五つの県の状況を、实地検分した」とある。「湖南省」の傍らには小さな文字で「面積二十一万平方キロメートル。日本の約半分の広さ」と書かれていた。図書館で調べて満枝が入れた注記だろう。

「農民運動」「土豪劣紳」「反动」「封建地主」と小百合にはなじみの薄い単語が並んでいて、なかなか内容が頭に入っていない。だが、文中に頻発する「革命」という言葉から、しだいに、この文書は、支那の革命指導者が、湖南省というところで起こった農民たちの革命運動について報告したものだということが、おぼろげながら分かってきた。

……湖南省における農民運動は、去年一月から六月までの極秘活動の時期を経て、七月から九月にかけて公然たるものとなり、それまでその地を支配していた軍閥の領袖を追放した。

……十月から本年一月までが、革命の時期である。農民協会の会員は二百万人に達し、農民協会が動員できる大衆は一千万人となった。

……農民は、農民協会の指導の下、ついに決起した。四ヶ月にわたり、前代未聞の農村大革命が勃発したのである。

小百合は、いつしか夢中になって冊子のページをめくっていた。それは、広大な支那大陸で起こった、輝かしく、そして悪夢に満ちた記録だった。支那についての小百合の知識は、学校で習った漢文、後は三国志や西遊記、魯迅の短編小説くらいのものであった。

激烈な言葉の列は、眩暈を覚えるような激流となって、小百合の頭の中に流れ込んできたのである。

……組織化された農民が最初にやったことは、土豪劣紳の威光を地に落とせしめることであつた。

ここで書かれている「土豪劣紳」と「農民」を、小百合がじかに知っている範囲の言葉に置き換えると、「地主」と「小作人」となるのだろう。広大な土地を所有する「地主」は、土地を持たぬ貧しい人々を「小作人」として雇い、わずかな小作料で働かせ、その収益で裕福な暮らしをしている。それに対して、「小作人」が待遇改善を要求する「小作争議」が全国的に頻発していることは、小百合も知っていた。

だが、支那・湖南省の農民たちが起こしたのは、日本の小作争議のような、生易しいものではなかった。

……土豪劣紳のうち、殊更富裕な者は、銃殺に処された。

……農民協会の命令に背いた土豪劣紳の家に、農民たちは大挙して押し寄せた。家を踏み荒らし、夫人や令嬢の寝台に土足であがって寝転んだ。四日間にわたって食事を出させ、百数十頭の豚を潰させた。

……各地で盛んに行われているのは、三角の帽子を冠らせ、村じゅうを引き回すことである。

その帽子には、土豪何某、劣紳何某と記されている。前後を大勢の人に取り巻かれ、彼は縄で縛られて歩かされる。農民たちは銅鑼を鳴らし、幟を立て、大勢の見物呼びを集め、「思い知ったか！」と罵詈雑言を浴びせながら、縄で縛られた土豪や劣紳にあらゆる制裁を加える。

……一度でも、このような制裁を受けた者は、廢人同然となり、二度と立ち上がれなくなるまでうちのめされる。

……農民協会は、この制裁を巧妙に使っている。彼らは捕らえた土豪に、この制裁を受けせると宣告する。そうしておいて、実際にはやらない。土豪は、いつ、あの制裁を受けることになるか分からず、日夜苦悶と不安のの日々を過ごすのだ。

……何もかもが常軌を逸している。村は恐怖に包まれる。

そして、この文章の書き手は、こうした「恐怖」を、「革命のためには不可欠」であり、「農村は、このような恐怖を作り出さねばならない」と評価するのだ。

……革命とは、客を饗応することでも、文章を書くことでも、絵を描くことでも、刺繡をすることでもない。左様な、上品で、優雅で、穩健で、慎ましいものではない。革命は暴動である。一つの階級が、他の階級を打倒する激烈な行動なのだ。

「小百合、ご飯だよ」

母親の声に、小百合は我に帰って冊子を閉じた。油紙で包み、文机の引き出しの奥にしまった。いつ帰宅したのか、居間から父親と兄の声も聞こえてくる。

短い廊下を歩いて、居間へと向かった。細く開いた襖の間から、夕餉の香りが漂ってくる。

「ほう、お前の会社の株、また上がったな」

「ええ、そのぶん給料も上げてもらえるといいんですがね」

父と兄の談笑が漏れてくる。小百合はふと思った。もし文書に書かれているような「農民運動」が日本に起こったら、地方官吏の娘であり、会社員の兄を持つ自分は、どちらになるのだから。

う。農民の側か。地主の側か。

……農民たちは、その節くれだった手で、地主たちの頭を押さえつけ、縄で縛り上げた。彼らの荒っぽい、容赦ない罵声が、毎日のように地主たちを震え上がらせた。

読んだばかりの冊子の一節が、脳裏に浮かんできた。

重いドアが開き、三十歳ばかりの女が顔を出した。名前を告げると、「うかがっておりました」と面差しも変えず静かに言った。

小百合が、伊集院満枝の洋館を訊ねたのは、その翌日、授業が終わってすぐであった。満枝から預かった冊子に書かれていた革命運動の苛烈さに、不思議な陶酔に襲われた小百合だったが、一夜明けると、陶酔は恐怖に変わった。

——こんな危険なものを持ってはいけな……。

小百合は冊子を幾重にも紙で包み、かばんの奥底に押し込めて登校した。授業の終わりを告げる鐘が鳴るなり、校門に向かって駆けた。

空はどす黒く曇り、身を切るような冷たい風が吹き荒れている。首から離れて飛んでいきそうになるマフラーを、毛糸の手袋で包んだ両手で押さえ、小百合はひたすら走った。伊集院家の洋館の門が眼に入ったときには、総身は汗にまみれ、肩で息をしていた。

出迎えた篠原ヨシに導かれ、通されたのは満枝の部屋だった。隅に、セントラルヒーティングのラジエーターが置いてあり、夏のように暖かい。北海道は、早くからセントラルヒーティングが普及していたが、実際にそれを所有している家は限られていた。小百合の家では、暖房はもっ

ばら炬燵と火鉢である。

ステンドグラスを施した張出窓には、ちらつきはじめた粉雪が貼り付いていた。吹き荒れる風が窓のガラスを叩く音が、室内の暖かさにも関わらず、荒んだ雰囲気を醸し出している。

そんな部屋のなかで、白いブラウスに紺のスカートをはいた満枝は、黒檀の机に座り、本を読んでいた。

いらっしやい。花が開いたような笑顔を浮かべ、本を閉じて立ち上がり、小百合の手をとって、部屋の中央に置かれたマントルピースへと導いた。白いユリの花を一輪挿した花瓶が置いてある。導かれながら、満枝の机にちらりと眼を走らせると、そこに置いてあったのは、勝海舟の『氷川清話』だった。

心臓を鷲掴みにされたようだった。冊子を返して、すぐに帰ろう。小百合はそう心を決めた。マントルピースを挟んで、向かい合って座ると、篠原ヨシがセイロン茶のセットを持って入ってきた。

「あの……」

一礼して去るヨシの背に眼をやり、ドアが閉まるのを待って、小百合はかばんから、冊子の堤を取り出してマントルピースに置いた。

「お返しに来ました」

「わざわざ、ありがとうございます」

満枝は包みを受け取って立ち上がり、壁にしつえられた書棚に納めた。

「どうだった？」

「……はい？」

「お読みになつたのでしょうか。どんな感想をお持ちになつた？ よかつたら、聞かせてくださらないかしら」

再び座り、頬杖をつき、身を乗り出すようにして、訊ねてくる満枝に、小百合は無意識に身を逸らした。

「あの……」

それきり、言葉が出てこなくなった。満枝は、小百合の前に置かれた陶器のカップに、セイロン茶を注ぎながら言った。

「無理もないわね。あなたには、少し刺激が強すぎたかもしれない」

あなたには……。では、満枝はあの文書を読んで、どう思ったのだろう。そう問いたくて躊躇っているうちに、満枝が口を開いた。

「わたくしにも、とても刺激的だったわ。五日前かしら、初めてこれを読んだとき、なかなか寝付けなくて、やっとまどろんだと思つたら、夢を見たの」

自分のカップに注いだセイロン茶を口に運んでから、満枝は遠くを見るような眼差しで語った。「この家に、小作人が大勢……そうね、百人かしら、千人かしら、押し寄せてくるの。家じゅう荒らされて、お金になりそうなものは全部略奪されて、そのベッドの上で、何十人もの男たちが飛び跳ねていたわ」

それはまさに、あの冊子に書かれていたとおりの風景だった。小百合は身を竦ませ、そっと満枝をうかがって驚いた。

満枝は、頬を紅潮させ、唇には得体の知れぬ笑みが浮かんでいた。体が小刻みに揺れている。そう、あの時。礼拝堂で独り、十字架上のキリスト像を見つめていた時と同じ、恍惚とした表情だったのだ。

その官能に満ちた面差しを見ていることができず、小百合は俯いた。

「わたくしは、庭に回って見た。何千人かしら、ひよっとしたら何万人かしら、おびただしい数の小作人たちが輪を作っていたわ。輪の真ん中には、両手を縛られ、三角の帽子をかぶらされた人たちがいた。小作人たちは、彼らを罵っていたわ。その罵り声は、まるで合唱曲のようにあたりじゅうに響いていた。縛られた人たちは、さんざん殴られたらしくて、顔が腫れ上がって、血を流していた。その血が、ぼたぼた地面に落ちていた。そのなかに……わたくしの両親もいたのよ」

満枝の言葉が途切れた。小百合は顔をあげ、息を呑んだ。

満枝は、右手で口を覆い、肩を震わせていた。泣いているのではない。抑えていた笑いは、やがて哄笑となって、赤い唇から迸った。

「両親がひどい目にあっているのに、なぜかわたくしは、小作人の輪のなかにいるの。誰もわたくしには手を出さない。おかしいわね。わたくしは本来、三角帽子をかぶらされる側の人間なのよ。実際、縛られた人たちのなかには、わたくしと同じくらいの年齢の、地主の娘さんもいたというのに」

「あ……」

満枝の夢の続きを聞くことに堪えられず、小百合はやっと声を振り絞った。

「……貸していただいた冊子に書かれていたことは、ほんとうにあったことなのでしょうか？」

「ほんとうにあったことよ」

笑いを収めて満枝は答えた。

「あの冊子は、もともと支那で秘密出版された本に収録されていた論文よ。上海で手に入れた人がいて、わたくしに、その中身を教えてくださったの。わたくし、とつてもその論文を読みたくなって、その方に翻訳をお願いしたのね」

「その方とは……」

「言えないわ。分かるでしょう。こんなものを持っていたら、アカと疑われて、捕まってしまうかもしれない。だから、絶対にその人の名前は教えてさしあげられないの」

なぜ、そんな危険な冊子を送りつけたりしたのか。小百合は、満枝を恨めしく思った。

危険な文書というだけではない。小百合もまた、昨夜、満枝と同じ夢を見てしまったのだ。

満枝の夢と違うのは、小百合は、小作人たちの制裁を受け、側にいたことだ。

両手を縛られ、身動きが取れぬまま帽子をかぶらされ、耳をつんざく怒声を浴びせられた。小作人たちは、ずらりと並んだ犠牲者たちを、順番に殴りつけていた。幼子も、少女も、老婆も、容赦なく殴打された。次は小百合の番になった時、目が覚めた。

小百合は、膝の上に置いていた両手を拳にして握りしめ、震えるからだを必死に押さえていた。満枝は、ごめんなさいね、と頭を下げた。

「あなたにはぜひ、読んでいただきたいたくて。その上で、あなたとお話しがしたかったの」
震えが止まった。眼差しをあげると、満枝は、寂しげな面持ちで、小百合を見つめていた。こ

れまでに見たことがないほど、弱々しい表情だった。

なぜ自分に……。小百合は当惑した。支那や社会主義運動について詳しいわけではない。何より、満枝と言葉をかわしたのは、あの礼拝堂での満枝と猪俣佐和子のやりとりをのぞき見た直後、校庭のベンチで並んで座った時の数語だけなのだ。

満枝は続けた。

「わたくしにも、よく分からないの。でもなぜだか、この冊子について語り合いたいと感じるお相手は、あなただけなの。あなたがわたくしのことをどう思ってるか、わたくしは知らない。でも、わたくしを怖がっていることだけは、よく分かるわ」

その眼が、うっすらと潤んでいるのを見て、小百合は狼狽うろたえるしかなかった。

「でも、あなたが考えてらっしゃるほど、わたくしは強い人間じゃないの。自分が感じたこと、思ったこと、考えたことを、独りで胸にしまっておけるほど、強くないのよ」

満枝は立ち上がり、張出窓に歩み寄った。

外は吹雪だった。強い風が、広大な洋館全体を揺らしていた。

「あなたはどうお思いになる？」

外を見つめたまま、満枝は背中越しに問うた。

「え……？」

「海の方こうの支那で起こったことが、この国でも起こるかしら？」

「分かりません。でも……」

小百合は立ち上がった。

「あの冊子は、おしまいの方に、村には泥棒もいなくなったし、賭博などの悪い習慣もなくなったと書いてありました。低かった女性の地位も、次第に高くなっていった、とも。確かに、恐ろしいこともありましたが、それはよりよい生活のための……」

「そう。清潔な生活。それも、暴力によってもたらされた清らかさ……」

満枝は振り向いた。さきほどまでその美貌を覆っていた弱々しさは消え失せ、生来の冷ややかな威厳を取り戻していた。

「暴力は、人に恐怖を与えるわ。たとえ泥棒がいなくなっても、賭博をするような悪い人がいなくなっても、それよりも大きな恐怖が、村全体を支配しているのよ」

「でもそれは……」

いつしか小百合は必死で言い返していた。

「それは、支那では悪い政治が行われていたためで、悪い政治を正しくするため、仕方なくやったことだと思います」

満枝の唇がかすかに笑んだ。小百合は、自分が吐いた言葉にたじろいだ。

小百合ははつきりと、社会主義革命家の言動を肯定したのだ。

「そうね。そのとおりかもしれない……」

満枝は、面差しを引き締めて頷いた。

「でも……こうも考えるの。一度、暴力と恐怖で人を支配することを覚えた人間が、たやすくそれをやめられるかしら」

「……………」

「人が人を支配するということは、ちょっとした快樂なのよ」
「でも……」

小百合は俯き、必死で考えをめぐらせた。
慈悲をもって民を治めていた支配者は、いくらでもないか。少なくとも、満枝はそう、学校で習っていた。

だが、考えがまとまらなかった。人を支配することの快樂。この言葉を覆せるだけの理屈を、小百合は思いつくことができなかった。

沈黙が続いた。小百合は床に眼を落としたまま動かない。
やがて、満枝が口を開いた。

「暗くなったわね」

すでに夕方すぎだった。吹雪のため暗かった室内は、ますます闇に覆われつつある。

満枝は、マッチを擦ってランプに火を点した。ほのぐらい灯りが、満枝の白い顔を照らし出した。

「やっぱり、あなたに読んでいただいて、正解だったわ」

「え？」

驚いて顔を上げる小百合に、満枝は微笑んだ。優しく、切なげな面持ちだった。

「今日は、ぜひ泊まっていらして」

「でも……ご迷惑では……？」

「この吹雪では、おうちまで帰れないでしょう。ご両親には、後で電報を差し上げて、事情をお

伝えします。一晚、あなたと語り明かしたいわ。いいでしょう？」

その日、満枝の家で供された夕食は、挽肉にタマネギを混ぜて焼いた料理だった。スープはコンソメ。洋皿に盛ったご飯を、フォークですくって食べた。ナイフとフォークの食事に慣れない小百合に、満枝は見下したふうは毫もなく、丁寧に使い方を教えた。

食事の後、入浴を勧められた。伊集院家の浴室は、タイル床に陶器製の湯船を置いた、西洋式だった。小百合の家には浴室はなく、銭湯に通っていた。湯船の外でお湯を浴びてよいものかどうか戸惑い、結局、お湯にからだを浸すだけにしておいた。

華やかな花柄の浴衣を渡され、それを着て居間に行くと、広いテーブルに、湯気のたつお汁粉が並べてあった。

向かい合って座り、お汁粉に箸をつけた。満枝は、弾んだ声で、最近の高等女学校の様子などを訊ねた。

天井からシャンデリアが下がっている広い居間を見回しつつ、満枝はいつもこんな広い部屋で独り寂しく食事をしているのだろうか和小百合は思った。

お汁粉を食べ終えると、寝室に案内された。ベッドが二つ並んでいる。

同じ部屋で寝るのか……。小百合の足が竦んだ。礼拝堂で、満枝が佐和子に接吻していた光景が蘇ってきた。

「安心して」

満枝は、小百合の恐れを察したかのように言った。

「あなたには、指一本、触れる気はないわ。佐和子さんと違って」

佐和子の名に、胸がざわめき、息が詰まった。ますます不安に苛まれる小百合を見やり、満枝はベッドに腰を下ろした。

「いろいろな意味で……あなたには、汚れてほしくないから……」

その夜はなにごともなく過ぎ、夜が明けた。翌日、小百合は早めの朝食を終えると家路についた。一度帰宅してから、登校しなければならぬ。満枝は玄関まで小百合を見送り、その小さな後ろ姿が見えなくなるなり、冷やかかな声音で篠原ヨシに言った。

「堀田のおじさまをお呼びして」